



1 歌川広重が描いた「東海道五拾三次舞坂今切真景」 2 北雁木のすぐ近くにある舞阪漁港。4月から7月までの第3土曜日には朝市が開かれている  
3 諸大名などの身分の高い人々が使っていた渡船場跡「北雁木」



ちゅうぶ  
～街道を往く～



# 交通の要衝となった舞坂宿に残る遺物を訪ねて

静岡県浜松市

浜名湖が海とつながったことで、街道はその姿を変え、渡し船による人々の往来は宿場を発展させてきた。今回は舞坂宿にスポットを当て、その歴史を探っていく。

## 渡し船によって繁栄した2つの宿場

歌川広重が浮世絵「東海道五拾三次舞坂今切真景」で描いたのは、青々とした美しい浜名湖の情景だ。手前に見えるのは蛤を獲る漁船、左端に描かれたのは強い波から船着き場を守るための防波杭。遠くには白く輝く富士山も見える。

浜名湖が現在のように、海水が出入りする「汽水湖」となったのは、今から約500年前。明応7年(1498)に起きた大地震と津波、そして台風によって自然につく

れていた堤防が決壊し、遠州灘と直接つながった。

200mほどの幅があるその場所は「今切」(現在は今切口)と呼ばれ、湖内では干潮時に干潟が出現する。今では、多くの人が潮干狩りなどを楽しむレジャースポットとなっている。

東西交通の難所であるこの地域では、渡し船が人々の往来を支えた。西は新居宿、東は舞坂宿という2つの宿場は、交通の要衝として大いに栄えることとなった。舞坂から新居へ行くための渡船場は3つあり、一番北に位置する「北雁木」は、大名などの特に身分の高い人々が

4 中村家住宅の主屋は国指定重要文化財となっている 5 土間では立派な梁を見ることができる(中村家住宅) 6 徳川家康の二男・於義丸を、お万の方が出産したときの後産が埋められた胞衣(えな)塚が現存する

